

ポリオ撲滅のためのパキスタン視察を受けての今後の行動計画打ち合わせ

4月24日岡山にあるAMD A本部に、堀川30周年実行委員長と當間総務委員長で伺いました。

当日は、AMD A本部スタッフの全体会議開催がされておりました。午前中は、菅波代表が今後三か年のAMD Aが、果たすべき役割についてのレクチャーが行われ、その三か年計画に関して各スタッフまた、当日、飛び入り参加された毎日新聞岡山支局長を交えて計画に関する質疑応答が行われました。昼食を挟んで、各スタッフの担当する事業の経過と今後の活動予定に関して報告がされ、菅波代表からはスタッフへのいくつかの助言が行われておりました。



1月に実施された「ポリオ撲滅のためのパキスタン視察」を受けての今後の行動計画に関しても、AMD Aからいくつかのご提案をいただき、検討することになりました。

今回の視察は、大変情勢が不安定な中でのパキスタン訪問になって訳ですが、AMD Aの危機管理に関しても、種々説明をいただきました。

AMD Aは、45年まえの前身の団体から56ヶ国に170回に及ぶ人道支援をする中で、スタッフの死傷事故はゼロだそうです。もちろん、派遣先には、災害後で治安が悪いところ、紛争が起きているところなども数多あることは想像できます。その中で、「最悪を想定し、最善を求めることが大事だ」という事でした。最悪の想定は、長い支援活動の中で、何度も危険とのニアミスを起こした結果得られるもので、この危険とのニアミスは外部には公表されないのが団体独自のノウハウになってしまうそうです。結果、活動期間が長い団体であるからこそ、安全な活動ができることでした。

また、菅波代表には派遣の三原則が大事という事でした。

- 1) 現地を知る現地の人間と行動を共にする
- 2) 危ない人は派遣しない。(好奇心が強い人、弱者と同じ目線になれない人)
- 3) 運気が強い人。(運気が下がるとき人は不安になり、質問が多くなる)

この三原則を守ることで、事故を起こさない活動ができるそうです。

今回の視察も、AMD Aの仲介で、パキスタン国内に精通するNRS Pが帯同してくれていたのも、これが理由だそうです。また、海外の活動にとって大事なことは、日本の学校教育が得意とする「していいことをする」というポジティブリストではなく、「してはいけないこと以外はしていい」というネガティブリストが大切であり、国境を越えたお付き合いで大事なコミュニケーション能力とは、語学力ではなく、その国の慣習や考え方を理解するということだとおっしゃっていました。

大変危険と思われたパキスタンの視察も、経験豊富で、各国にパートナーを有するAMD Aのサポートがあったからこそ、偶然成功裏におわったのではなく、それが必然であったと実感できました。

